

研究ノート

西田幾多郎を生んだ地，宇ノ気と金沢¹⁾福井 雅美²⁾

UNOKE and KANAZAWA

— The Birthplaces of Nishida Kitaro's Philosophy —

FUKUI Masami

The object of this paper is to report about the places where Nishida was born and spent his young days, Unoke and Kanazawa.

Unoke, Nishida's birthplace, is a small town (a farming village in his days) and distant 20 km from Kanazawa. He lived there till 12 years old. There are many memorial spots in connection with him.

Kanazawa is one of the most important cities in the history of Japan. Firstly it developed as a religious center, the base of Shinshu-sect, and then prospered as a great castle town in the Edo period. Since the Meiji Restoration it grew into a modern city of culture, studies and military. We can see all these historic backgrounds in Nishida's philosophy.

Nishida was a student of the Fourth High School in Kanazawa from 1886 till 1890 and became a teacher of the same school some years later. His teacher-life was full of conflicts with the conservatism of the school, but he later described those days as "my best days". He devoted himself to the Zen practice and brought forth the nuclear thoughts of *A Study of Good* in Kanazawa.

There are many historic spots including the building of the Fourth High School and people in Kanazawa call Nishida "our master" even now.

Key words : The Meiji period, Modernization of Japan, The Fourth High School

キーワード : 明治時代, 日本の近代化, 第四高等学校

平成12(2000)年8月10, 11日の二日間, 西田幾多郎の出生地である石川県の宇ノ気町, そして旧制第四高等学校の学生および教師として『善の研究』出版までの前半生をすごした金沢市へ, 研究会より出張の機会をいただいた。若き日の西田の足跡をたどったこの旅の印象を, ざっくばらんにつづってみたい。

— 宇ノ気町

10日の昼, 特急サンダーバードは金沢駅へ着いた。実は生来の出不精, 観光地中の観光地というのに, 金沢(北陸すら!)はこれが初めてである。どこから回ろうかと, 土地勘のなさに多少不安ながら, ワクワクする。とりあえず駅コンコースを抜け, 「石川県金沢観光情報センター」と書かれたカウンターへ行った。「西田幾多郎に関する史跡はどこにありますか」と聞くと, 美しいコスチュームを着けた案内嬢

1) 本研究は、立命館大学人間科学研究所における2000～2002年度プロジェクト研究B(西田幾多郎のライフヒストリー研究)の成果である。

2) 立命館大学非常勤講師

が

「西田幾多郎先生ですね、ちょっとお待ちください」

と奥へ。しまった、ここでは「先生」をつけなくてはいけないのだと、さっそく一つ学習した瞬間であった。金沢では、石川県では、西田は今も生きているのだ。哲学とは縁がなさそうな、こんなきれいなお姉さんにいたるまで。以後、県内で行動する間、私がずっと西田に「先生」をつけ続けたことはいうまでもない。戻ってきて案内嬢が言うに、市内では二カ所、市の北東に横たわる卯辰山（西田が参禅に通った洗心庵跡だな、と私はわかった）と、市の中心の繁華街、香林坊から広坂通りを東に上っていったところに、それぞれ記念の石碑があるらしい。

まあ金沢市内は明日回ろうか、と考え、まず駅前のホテルにチェックイン、荷物を置いて、宇ノ気へ向かうことにする。ホテルの洗面所で、蛇口から出る水の冷たさに、北陸へ来たんだなと実感した。

能登半島の方角へのびるJR七尾線に乗り、宇野気へ。金沢からは七駅目、25分、20キロ強をコトコト揺られた。単線で、駅舎もいかにもローカルなたたずまいである。駅前には西田の大きなブロンズ全身像が立ち、「あ、ここにもさっそく西田先生だ」と思った。

幾多郎は明治3（1870）年5月19日、西田得登と寅三の長男として、石川県宇ノ気村（現・河北郡宇ノ気町）字森に生まれた。父母ともに代々旧加賀藩の十村（とむら）をつとめた家の出身で、特に西田家は字一帯を掌握し米収350石をかぞえたという¹⁾。

十村とは、他でいう大庄屋にあたり、身分は農民ながら藩政の末端を担い、年貢の徴収や火消し等、農村を管理する役職であった。名字帯刀を許されることもあったという。翌日に見学した石川県立歴史博物館に十村の火消し装束が展示されてあったが、赤穂浪士の討入装束そっ

くりの、なかなか立派なものであった。

生家は、幾多郎が三歳の明治6年に隣家からの類焼にあい、焼失して残っておらず、現在は「西田幾多郎出生地」の記念碑が立つのみで、すぐ近くに西田家菩提寺である長楽寺と西田家代々の墓所がある。一家はその年、同村の向野に転居した。こちらの家も現存はしておらず、「生い立ちの地」と記した碑がある。「日々白砂青松の間を遊び廻りて清き自然の中に余念なく幼時を経過した」²⁾と西田が回想するのは、この家ですごした子供時代であったろうか。もちろん、どちらの家も、広く立派な庄屋敷であったようだ。

裕福な上に、父得登は教育熱心な人であったらしい。思うに彼の二人の息子のうち、長男の幾多郎には父のインテリジェントな面が、三歳下の次男憑次郎にはやや道楽肌の豪放な面が、きっちり分かれて受けつがれたのではなからうか。それはともかく、明治8（1875）年4月、得登は長楽寺内に小学校を開設し、みずから教師をつとめると共に幾多郎を入学させる。明治12年には、西田家の持ち家を利用して、新化小学校を開設した。現在の町立宇ノ気小学校の前身である。

明治15年4月に小学校を卒業した幾多郎は、金沢で上級学校に進むことを志し、石川県女子師範学校に籍をおく次姉の尚に連れられて郷里を出た。そして姉と共に金沢市内に下宿し、数人の学者から漢学、数学等の個人教授を受けつつ入試にそなえ、明治16（1883）年7月、石川県師範学校に入学する。他の家族も順次、宇ノ気村より金沢へ移った。諸種の伝記にあるごとく、これにはいろいろと複雑な家庭事情（父母の不仲、父が事業で借財をこしらえたことなど）が背景にあったようだが、ともあれここに、幾多郎ならびに西田家の人々が宇ノ気村ですごした時期は終わるのである。

さて、宇野気駅へ降りたった私に話を戻させ

ていただく。まずは町立西田記念館を訪ねるべく、駅前からまっすぐ南北にのびる通りを南へ、つまり日本海と逆の方へ歩いた。田舎町とはいえ、両側は銀行やビルが建ち並び、かなり広い通りである。高坂正顕や下村寅太郎が、終戦後ほどない昭和22年にこの地を訪れた紀行文を残しているけれど、さすがに彼らの伝えるような、うらぶれた寒村のイメージはもはやない。

15分ほど歩いたところで、先述の「生い立ちの地」記念碑に出くわした。家そのものは現存しないので、気づかず行き過ぎてしまうほどの、ごく小さく囲ったスペースである。細長い石碑と、その右に、低い岩にブロンズ板をはめこんだ歌碑があり、板には「吾しなば故郷の山に埋れてむかし語りし友を夢みむ 西田幾多郎」と刻まれていた。さらに少し歩くと四つ角に本楽寺というお寺があり、そこを右に曲がると西田記念館であった。

二階建てのこじんまりした館内には、西田自身および家族の肖像画や写真パネル、遺品、論文の生原稿、書簡、墨跡（二階のほとんどのスペースがあてられていた）など約200点余が、ところ狭しと陳列されていた。あまり厳密に年代順やテーマ別に分けられておらず、雑然とした感じの並べ方であったが、遺品の中で私が最もユニークと思ったのは、手の平にほぼ入る大きさの人形である。西洋の兵隊さんのような格好をしたそれは、かなり薄汚れ、ゴム製か何かであろうか。そばに「リウマチのリハビリに使った」旨の説明書がある。晩年リウマチを患い、身体の不自由に苦しんだ西田が、このかわいらしい人形をギュッ、ギュッと握って指の訓練をしている（私たちが写真でよく知るあの眼光鋭い面持ちで！）ところを想像し、何ともいえない心地がした。ほか、遺品はどれも地味で質素なものばかりで、何点かあった着物など、失礼な言い方をすればむさ苦しく見すばらしい、良

く言えばストイックな生活ぶりをしのばせた。

記念館本館の隣に、洋風造りの書斎がある。西田が京都で最後に住んだ左京区田中飛鳥井町の邸宅（書斎は、当時より家の他の部分とは少し離れたところに設けられ、本宅と廊下でつながっていたらしい）が、三女静子の死後無人となったため昭和49（1974）年に解体処分されたさい、宇ノ気町が働きかけて、書斎のみ移築保存したものだ。大正11（1922）年建造、大正モダニズムを感じさせる木造、タイル腰のモルタル仕上げである。

西田が「骨清窟」と名づけたこの書斎の内部は、多くの本にこれでもかと写真が出ていてよく知られており、私も写真で、つまりモノクロで知っていたが、実物をカラーで見て、みごとにいかめしい真っ茶色、すべてが煮しめたようなアメ色であるのには、年代ものの古さを感じた。が、同時に非常な驚きをおぼえた。ついさっき本館の展示物のうちに見た、静子の油絵とのギャップにである。女流画家であった静子の描く書斎は、壁が目のさめるようなスカイブルー、マントルピースの大理石は真っ白に輝き、じゅうたんの柄は鮮やかに浮かび上がって、みんな明るくカラフルだ。楽しげで華やいだ空気すらただよう。置いてある物は、まったく同じなのに。多少年数がたったくらいで、物の色がこれほど変わるとは、ちょっと考えられない。思うに当時から、書斎の色は、だいたい今と近い地味なものだったのではないだろうか。だが、静子にとってそこは、大好きな父が心ゆくまで思索を楽しみ、その頭から宇宙にも比すべき思想が渦を巻いてあふれ出す、創造の場だった。だから彼女は、この空間をみずみずしい色彩でキャンバスと自らの心とに描きとめずにはいられなかったし、そうして父の思い出と共に暮らしながら、終生父の家を大切に守ったのだろう。私はそんな気がする。

なお、西田記念館は平成14（2002）年6月

より、場所を若干移転し施設を大幅に拡充して、「石川県西田幾多郎記念哲学館」としてリニューアルオープンした。地上五階、地下一階建て、300人収容のホールや研修室、図書室などを備える。西田の遺品等の展示品数は前とほぼ同じであるが、パソコンを使った哲学ゲームなど、哲学に初心の観覧者も楽しめるような現代的工夫がこらされているようだ。今回、本稿の執筆にさいしぜひ行って見たかったが、都合がつかず行けなくて残念であった。ただし書齋は、元の記念館の場所に今もあるそうである。

記念館でもらった地図を片手に、ひき続き周辺を歩いてみた。記念館のすぐ隣が宇ノ気小学校である。前述のように西田とはゆかりが深く、ゆえにモニュメントが多い。胸像、石碑、また校舎の外壁に西田の書より「無」の字を拡大したレリーフなど。校庭までは入れたが、夏休みで人の気配はない。本当なら校長先生にでも、生徒に日常どういふ西田のお話をしておられるのかお聞きしてみたいところだが、あきらめて出る。

先の広い通りに戻って、ふたたび南へ歩いた。宇ノ気川へ出るまで、通りの両側に、数メートルおきにポツポツと、開いた本の形をしたブロンズ製の歌碑が並ぶ（合計10基、25首）。ページの部分に西田の和歌が刻んである。炎天下、まるで好み焼きの鉄板状態。熱くてさわれない。

西田が幼時メダカ採りに興じたという宇ノ気川を渡り、さらに南へ。このあたりから景色が変わり、道も急に狭くなる。高坂が昭和22年に「森は向野からは田圃を距てた五、六丁さきの、後ろに小高い丘のある森林に蔽われた寂しい部落でした³⁾」と書いたイメージとあまり変わらない。茫漠と広がる田圃風景。人も車も、誰一人通らない。カンカン照りの下、田んぼの間の一歩道をテクテク歩く。甘かった、北陸でも暑いものは暑い！ ふと、ここで何かあって

倒れても、誰にも発見されないのではないかという思いが、心をよぎる。倒れてたまるかと歩き続けると、お寺の屋根らしきものが見えてきて、はたして長楽寺であった。見た目は何の変哲もない、普通のお寺である。境内には、西田の小学校時代の学友で力士となった「若の森」を記念して、西田の書いた「若の森」の字を刻した石碑が建てられている。

寺から少し行くと、「西田幾多郎先生出生之地」の碑と、墓地にたどりついた。やれやれ、やっと来ましたよと西田家の墓（幸い墓地の入り口近くにあった）に手を合わせ、来た道を駅へひき返した。

帰路改めて測ってみると、この生地跡から向野の「生い立ちの地」記念碑までが徒歩30分、「生い立ちの地」から駅までが徒歩15分であった。ちなみに私は歩くのが速い方と自負しており、生地も生い立ちの地も、海からはかなりの距離である（駅から海までどれくらいあるか、さらに駅から北へ歩いて確かめてみたかったが、暑さと疲れで断念した）。ここで疑問が残った。西田といえば「白砂青松」。砂浜で海と戯れて育ち、そのため終生海を愛した思想家というイメージがある。だが、森の生家はいうにおよばず向野の家からでも、海辺に出るには子供の足では相当の距離だ。昔の子供は、今みたいなモヤシっ子でなかったとはいえ。海への愛着は、実際の幼時体験がそうだったというよりも、長じてからの彼の思想の方が、逆に海のイメージをおのがもとへ呼び寄せたのではないだろうか？ だが、答えを出すのは容易ではない。ともかくこの日は、ホテルに帰るや身体が変調をきたし、当初それを夏風邪と勘違いして服を着こんだり冷房を切ったのがさらに災いして、つまり日射病による発熱で夜通し苦しむことになる。

二 金沢市

思えば、この年の夏は記録的な猛暑で、各地で熱中症による死亡事故も多々報告されていたのであった。階下の廊下に置かれた無料製氷機へ二度ほど氷を取りに行ってはビニール袋に入れ氷のう代わりにしていたが、それもしんどくて行くのが嫌になり、部屋の冷蔵庫から缶コーヒーやビールを代わる代わる取り出しては額にあてた。そうしてフラつく頭で起き上がった8月11日。この体では、残念ながら予定より規模を大幅に縮小せざるをえなくなったが、ともかく金沢探索へと出発した。

金沢は古く、かつ多面的な歴史的背景を持った街である。第一に、現在にいたる真宗の信仰の伝統がある。十五世紀末、本願寺八世法主、蓮如が北陸地方の農民に浄土真宗を布教したのが始まりで、独立農民の台頭を背景にその勢力は急速に拡大し、名高い加賀一向一揆となった。天文14（1545）年から翌年にかけて、一向宗徒の総本山として、市の中心の丘、現在の金沢城址公園に築かれたのが金沢御堂である。西田家では、特に幾多郎の母寅三が真宗の信仰あつく、乳をねだる幾多郎にまず蓮如上人の「御文章」を暗誦させ、それから授乳したという⁴⁾。

第二に、言わずとしれた加賀前田家「百万石」としての顔がある。幕藩体制のもと、金沢は有数の城下町として繁栄をきわめた。だがそれだけに、幕府の凋落と運命を共にせねばならぬ皮肉を味わった。維新にさいし、割を食う立場へと追いやられ、薩長藩閥による中央新政府へのアンチの気風が、以後この地の人々の心の底層を流れることになる。その顕著な一例が、明治11（1878）年5月14日の紀尾井町事件、すなわち石川県士族による大久保利通暗殺事件であろう。

第三は、「学都」金沢の顔である。藩政時代からあった諸学校の隆盛をうけつぎ、明治期も、

他の地方都市に先がけて高等教育の充実がはかられた。明治5（1872）年の学制発布以前から鉱山学所、医学館、理化学校が設けられ、お雇い外人と呼ばれる外国人教師が教育にあたった。西田が当初入学した石川県師範学校は、明治7年の創立である。明治8年には、旧藩校明倫堂の後身、啓明学校が石川県専門学校と改称し、さらに20（1887）年には第四高等中学校となった。これは第一（東京）、第二（仙台）、第三（京都）、第五（熊本）と相前後して開校されたもので、明治27（1894）年には学制改革にともない、第四高等学校と改称する。明治25年に広坂通りに赤レンガの校舎が建設された（後述するように、現在は石川近代文学館となっている）。「我々の中学時代というのは、明治文化の欧化主義の頂点に達した頃であった」と、西田は往時を回想する⁵⁾。

第四に、近代の金沢は「軍都」の顔をも持っていた。明治6（1873）年、徴兵制施行にともない、金沢城跡に名古屋鎮台の分営が置かれ、明治8年に第七連隊と改称した。そして明治31（1898）年には、日清戦争後の軍備拡張に沿い、第九師団が創設されるに及んで、金沢は北陸最大の軍都となる。同年の鉄道開通は日露戦争にそなえたものであったし、駅そのものも軍隊の集合地を確保すべく設計されたという⁶⁾。長いコンコースが駅中央を一直線に貫き、その両端（東口と西口）が広いスペースになっている金沢駅の一風変わった構造を見ると、なるほどと思う。はたして第九師団は日露戦争に中心的に動員され、特に最大の激戦であった旅順・奉天攻略で多数の石川県出身戦死者を出した⁷⁾。その中に、幾多郎の弟、西田憑次郎もいたのである。

さて、金沢に出て石川県師範学校に入った西田であったが、入学の翌年にチフスにかかり、休学をへて結局退校する。そして改めて明治19（1886）年9月、石川県専門学校に入学した。

これは「当時において外国語で専門の学業を授ける学校であった。東京を除いて、地方では、この頃、この種の学校は殆ど他になかったろうと思う。百万石の力で明治の初年既にこういう学校が金沢にできたものと思う」と西田は書く⁸⁾。校風の面では、「学生というのは、悉く金沢の旧士族の子弟であり、先生というのも、皆この学校の卒業生で、兄貴分といった風であり、七年の学校といえば最下級のものと最上級のものと、可なり年齢の差があるのであるが、それでも誠に親しく、全体が一家族というような温味のある学校であった⁹⁾」。金沢の風土と伝統に根ざしたこの家族的温かみの中で、西田は生涯の師北条時敬から数学・英語を学び、生涯の友鈴木貞太郎(大拙)、山本良吉、藤岡作太郎らと知り合う。

しかし、石川県専門学校は、前述のごとく明治20年、第四高等中学校と改称し、官立、すなわち文部省直轄へと移行する。これは、単なる名称変更と移管にとどまらず、学校そのものの性質ががらりと変わったことを意味する。第一から第五まで番号をふられ設置されたこれらのいわゆるナンバー・スクール、高等中学校は、地方に設立されても地方の人材(ローカル・リーダー)のための学校ではなかった。高等中学校を創設した初代文部大臣森有礼がいみじくも第四高等中学校開校式に臨席し、式辞で「国家全体の重要な部分を占むる」「人物」を養成する学校である、と述べたように、国家の人材(ナショナル・リーダー)を吸収し、育成する学校であった¹⁰⁾。そして、薩摩出身であった森は、金沢に薩摩隼人の教育を注入するべく、初代校長として鹿児島県の県会議長をしていた柏田なる人物を送りこむ。その校長について来た幹事や舎監といった職員も、みな薩摩人で警察官などをしてきた人々であった。西田にとって、校風の変化は劇的であった。「師弟の間に親しみのあった暖な学校から、忽ち規則づくめな武

断的な学校に変じた。我々は学問文芸にあこがれ、極めて進歩的な思想を抱いていたのであるが、学校ではそういう方向が喜ばれなかった。その上、当時の我々から見ても学力の十分でない先生などあって、衝突することも多かったので、学校を不満に思うようになった¹¹⁾」。

不満が西田を友らとの自由闊達な反教師的行動へとかりたてる。「四高の学生時代というのは、私の生涯において最も愉快的な時期であった。青年の客気に任せて豪放不羈、何の顧慮する所もなく振舞うた。その結果、中途にして学校を退くようになった¹²⁾」。明治23(1890)年3月のことである。

その後、西田はしばらく金沢を離れる。明治24年から27年まで東京の帝国文科大学哲学科選科に学び、28年4月から翌年3月まで能登の七尾町にて石川県尋常中学校七尾分校に教諭(倫理・英語・歴史担当)として勤務したのち、金沢へ戻り明治29(1896)年4月、第四高等学校講師に就任する(ドイツ語担当)。

だが、早くも次の年の5月、学校の内紛に巻き込まれ、四高講師を罷免されてしまう。ちょうど私生活においても、家庭のトラブルから妻と一時的に離縁させられるなど、若き西田にとって苦難の時期であった。この頃から、何かにとりつかれたように参禅への関心が本格化していく。同年9月、山口高等学校校長であった恩師北条時敬の招きにより、同高等学校教務嘱託(のち教授)として、単身山口へ赴任する(英語・ドイツ語・倫理担当)。そして明治32(1899)年7月、四高校長となった北条にふたたび招かれ、西田は四高教授(心理・論理・倫理・ドイツ語担当)として金沢に戻り、以後十年間その職をまっとうすることになる。「金沢にいた十年間は私の心身共に壮な、人生の最もよき時であった¹³⁾」とのちに回想することになる充実した時を、ようやく迎えたのである。

さて以上のようなわけで、西田といえば四高

を見なくてはならない。ただちに私は、現在石川近代文学館となっているその建物へ向かった。石川県庁隣接の中央公園（旧四高の運動場をそのまま公園として利用している）の中に、うっそうとした緑に囲まれて、赤く映えるレンガ造りのそれはあった。国指定の重要文化財、旧第四高等学校本館校舎である。丸くアーチを描く窓枠の形がなんともモダンで美しい。設計者は、明治初期に第二回海外留学生となり、パリのエコール・サントラルに学んだ山口半六と、西洋建築の導入に貢献大きかった久留正道とのこと。昭和25（1950）年、旧制高等学校廃止にともない閉校されてからは、金沢大学理学部、金沢地方裁判所、県立郷土資料館と、さまざまな用途に転身を重ねたのち、昭和61年10月25日（旧四高開学百年祭日）より石川近代文学館としてオープンした。

中に入ると、むっと木の床の臭いがこもっている（ちなみにエアコンはない）。教室の一室一室を展示室にあて、近代の作家文人たちの著書や原稿、愛用品などを陳列してある。金沢出身の泉鏡花、室生犀星がやはりメインだ。西田幾多郎も鈴木大拙らと共に展示スペースが設けられており、「プチ西田記念館」といった感じで原稿や着物が置かれていた。

二階は、四高についての展示室になっている。廊下に面したドアの一つに「四高同窓会本部」と書かれており、現在もここに本部を置いて活動されているそうだ。展示室には、「三々塾」学生名簿、寮の日誌、西田もしばしば論文を寄稿した校友会機関誌『北辰会雑誌』、五代校長北条時敬筆の書額、歴代校長の写真などが並んでいた。三々塾は、西田が同僚の教師数名と共に、明治33年に学生指導のための自治活動として始めたもので、寺を借りて合宿形式の例会を開き、教師が精神的な講話をして、学生と忌憚なく意見をぶつけ合った。西田退職ののちも長く受けつがれ、昭和11年頃まで続いたら

しい。さらに四高教授時代の西田は、長町や本多町等の武家屋敷を借りて住んでいたが、その自宅に常時学生数名を住みこませて世話していたし、寄宿舍「時習寮」の舎監をつとめたり、ファウスト会、ダンテ会といった読書会も組織するなど、学生思いのまめな教師ぶりを見せていた。先の「人生の最もよき時」という言葉がしのばれ、こういう教え子への面倒見のよさがのちの京大時代にも引きつがれ、世に京都学派と呼ばれる弟子たちの一大グループを形成する元になったんだと、展示を見ながら思った。

だが、歴代校長の写真に目をやると、北条の次の第六代以後、とたんに堅苦しくいかめしい正装（フサフサと羽根飾りのついた帽子を脇に抱えたような）や軍服姿になるのには、不穏な感じをおぼえた。はたして明治35（1902）年5月、北条が広島高等師範学校へ転任すると、後任の吉村寅太郎校長と西田ははなはだ相性が悪かった。以後数年間、私生活でも悲運が続く（明治37年弟憑次郎の戦死、40年娘二人の死、その翌年にかけて自身の肋膜炎）。

さまざまな葛藤の末に明治42（1909）年7月、西田は学習院教授（ドイツ語主任）に任ぜられ、上京する。ここに彼の金沢時代は終わった。だが金沢で、すなわち四高ですごした日々は、まぎれもなく人間西田、哲学者西田を作った日々であったといえよう。「過去の思出なくして我というべきものはない、過去の思出が我というものの存在を意味するならば、四高の思出は私というものから除き去ることのできない私の大部分を占めているといわねばならぬ。私が四高の一生徒であった時は、人間一生の方向の定まる青年時代であり、私が四高の一教官であった時は、三十から四十までの人間の一生において最も元気旺盛の時代であった。¹⁴⁾」

ここらあたりで四高に別れを告げ、石川近代文学館を出る。武家屋敷の家並が今も残る長町界隈をぜひ見てみたかったが、体力温存すべく

断念（館内に冷房がなかったため既にバテていた）。そのまま館の前の広坂通りを東へ歩く。兼六園が見えてきた。園内の石の上で座禅したとか、西田も親しんでいたらしい兼六園だが、がまんして素通りする。前日に観光情報センターで聞いた記念碑とやらを探しつつ、本多の森公園まで歩いたが、どこで見落とししたのか、結局見つからなかった。おそらく、西田の住居があった旨の碑と思うが。何かの役に立つかと思いい、県立歴史博物館に入って金沢の歴史を勉強する。これまた、旧陸軍兵器庫を転用した、美しい赤レンガ建築である。

それにしても、そこそこ規模の大きい都市でありながら、なんと緑の多いこと。自然を含む都市空間という点では御所を擁する京都の景観とも似るが、しかもその自然豊かなスペースが街のメインストリート、ショッピング街や行政の中心部にすぐ面しているのが、京都とも違うユニークなところだ。もともと城下の約半分を武家地が占め、武家屋敷がその緑豊かな庭園ともども広い空間ポテンシャルを有していたことが、明治以降の金沢をも「森の都」として特徴づけることになったのだった¹⁵⁾。こうした景観がそこに住む人の精神風土に与える影響は、独特なものがあるのではないだろうか。そういえば、「実在は現実そのままのものでなければならぬ」、自然科学の説くような色も音もない抽象的なものでなく、という『善の研究』の根本をなす考えを、西田は「まだ高等学校の学生であった頃、金沢の街を歩きながら」着想したと書いていたのを思い出す¹⁶⁾。

残るは卯辰山の洗心庵跡のみ、ということで県庁前までふたたび戻り、その停留所から卯辰山頂行きバスに乗った。実は、卯辰山のどこに洗心庵跡があるのか知らない。そこで無謀にも、山頂まで行き、そこから徒歩で下りながら記念碑を探すことにした。本当に無謀だった。標高141メートルと低い山ながら、あとで知っ

たところでは別名・碑林公園、60以上の文学碑や記念碑があるのだから。それらの石碑に出くわすたび一つ一つのぞきこんで調べながら、足をひきずりただただ歩く。結局、見つけてみれば、ほとんど山を下りきったふもと。市街地から天神橋を渡り、登って5分ほどの所に洗心庵跡を示す石碑は立っていた。「山中にこもって座禅する」というイメージからもっと山深く登った所を考えていたのだが、市街地とのあまりの近さに、ちょっと拍子ぬけしてしまった。が、当時は今ほど街がにぎやかではなかったろうから、ここでも日常の喧騒を逃れるには十分だったのだろう。

ここに西田は明治29年から39年まで通い、ほぼ毎年、年末から正月は家族と離れ洗心庵ですごしたのである。帰りの車中で時間を測ったところ、県庁前、つまり四高とここの間はバスで20分であった（途中に渋滞のたぐいはなく、普通の車のスピード）。もちろん、当時バスはない。四高やその近くの西田の自宅（長町、本多町など）からは、徒歩で相当の距離である。しかも北陸の真冬、分厚く積もる雪の中をザクツ、ザクツと。よほどの熱意がないとできないと、自分で行って初めてわかった。

バスで金沢駅へ直行、そのままJRで家路についた。日射病と疲労から体が元通りになるのにずいぶんかかったが、あの時のしんどさと共に思い出すのは、あたかも社会派推理小説によく出てくる「コツコツ足で稼ぐ」タイプの刑事よろしく、自分の体を使って歩いてみてわかることの大切さである。その意味で、西田の何かに触れることができた気のする旅であった。

注

- 1) 西田静子「父」、西田静子・上田弥生『わが父西田幾多郎』弘文堂書房、1948年、4ページ。
- 2) 「余の弟西田憑次郎を憶う」『全集』第13巻166-167ページ。西田の著作からの引用は、岩波書

- 店刊『西田幾多郎全集』（1947 - 1953年刊行）より行い，以下『全集』と記して巻数とページ数を付す。ただし，漢字と仮名づかいは現代のものに改める。
- 3) 高坂正顕「宇ノ氣村の記」『西田幾多郎先生の追憶』燈影舎，1996年，159ページ。
 - 4) 竹内良知『西田幾多郎』東京大学出版会，1970年，6ページ。
 - 5) 「山本晁水君の思出」『全集』第12巻250ページ。
 - 6) 高澤裕一・河村好光・東四柳史明・本康宏史・橋本哲哉『石川県の歴史』山川出版社，2000年，277ページ。
 - 7) 日露戦争における石川県関係者の戦死者の割合は，高知，岐阜県に続いて全国第三位の高位であった。実録石川県史編集委員会『実録石川県史1868 - 1989 / 激動の明治・大正・昭和全記録』能登印刷出版部，1991年，163ページ。
 - 8) 「山本晁水君の思出」245ページ。
 - 9) 「同」同ページ。
 - 10) 竹内洋『日本の近代12学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社，1999年，51 - 52ページ。
 - 11) 「山本晁水君の思出」247ページ。
 - 12) 「或教授の退職の辞」『全集』第12巻170ページ。
 - 13) 「同」同ページ。
 - 14) 「四高の思出」『全集』第12巻164ページ。
 - 15) 島村昇『金沢の家並 - 近代文学にみる原風景』鹿島出版会，1989年，100ページ。
 - 16) 『全集』第1巻7ページ。
- （2002.12.17. 受理）